

研究報告

恋愛ドラマとケータイのコミュニケーション論

—恋愛ドラマの背景に映り込む「ケータイのディスプレイを見る行為」—

‘Keitai’ (Cell phone) communication in soap operas

— The action of “Looking at ‘keitai’ displays” pictured in the background in soap operas —

中村 隆志 Takashi NAKAMURA

新潟大学人文学部

Faculty of Humanities, Niigata University

要 旨

公共空間において「ケータイのディスプレイを見る行為」が目立ち始めた時期、ならびにその増加傾向を探るための調査を行った。今回の調査対象として、恋愛ドラマを活用することの意義を検討し、その上で恋愛ドラマ内に登場するエキストラに注目して調査を行った。1996年から2010年までに放映された恋愛ドラマを調査した結果、「ケータイのディスプレイを見る行為」を行うエキストラは、2000-2001年の間に目立って増え始めたことと、2008-2010年の間に顕著に増加することの2点の確認できた。この2つの増加傾向を引き起こすための条件として、当時の通信環境、ケータイ端末、サービスなどの変化があったことを考察した。

Abstract

This report focused on the estimation of dates when background actors (“extras”) appeared in soap operas “looking at keitai (cell phone) displays” and the tendency of the number of these extras to increase in recent years. The study analyzed soap operas that were broadcasted in Japan from 1996 to 2010 for confirming that extras looking at keitai displays were first seen from 2000 to 2001 and that their numbers significantly increased from 2008 to 2010. The increase in the two periods resulted from changes in the following three conditions: the environment for communication, cell phone terminals, and service for keitai users.

1. はじめに

1990年代、公共空間に於けるケータイ（携帯電話、PHSを総称する）利用は、問題視されていた^[1-2]。ケータイは、携帯する電話機として、通話利用から始まり、電車内など様々な場所でマナー違反を引き起こしたため、公共空間でのケータイ利用（＝通話）は、違和感とネガティブなイメージを持たれていた。ケータイが多機能化し、ほとんどの人が持ち歩くようになった2011年、公共空間でのケータイ利用（＝多くの人が「ケータイのディスプレイを見ている」）は当たり前のように行われている。

では、街中で見かける「ケータイのディスプレイを見る行為（メール操作など、ケータイのディスプレイを見ながら指で操作する行為を含む）」は、徐々に街中で増えてきたのだろうか、それとも、ある時期を境に一気に急増したのだろうか？また、公共空間の現在の「当たり前」の光景は、いつ頃から疑いもなく「当たり前」になったのだろうか？これらの問いの答えを近似的に探っていく。

本稿では公共空間や路上における「ケータイのディスプレイを見る行為」の経年的な変化を概観することを目標とする。そのために、恋愛ドラマを活用して^[3-4]、公共空間におけるこの行為の増加傾向を経年的に調査する。

2. ケータイのディスプレイを見る行為

2011年現在、ケータイユーザは、屋外屋内を問わず、様々な場面でケータイを用いるようになっており、街中で「ケータイのディスプレイを見る行為」に遭遇する頻度が高くなったと感じる読者も居るだろう。筆者と共同研究者は、「ケータイのディスプレイを見る行為」が、非言語的行動として人々の日常的なコミュニケーションに用いられる場合があることを指摘し、その効果が一定の役割を獲得しながら人々の間で根付きつつある実態を解き明かしつつある^[5-10] (1)。本稿では、この行為の大まかな発生時期とその後の推移を概観することを目標とする。

「ケータイのディスプレイを見る行為」が非言語コミュニケーションとして機能するためには、メールやWebページなど、本来見るべき目的を持ってディスプレイを見る行為が繰り返されることがまず前提となる。また、これまでの調査において得られていることだが、ほとんどのケータイユーザが、他の多くのユーザ達も「ケータイのディスプレイを見る行為」を頻繁に行っており、そのような環境の中で、自らもその他大勢の一人として振る舞っていることを明瞭に意識している^[5-6]。つまり、「ケータイのディスプレイを見る行為」を通じた非言語コミュニケーションの始まりは、公共空間や路上において、一定数のユーザが本来の目的（メールやWeb）でこの動作を行うよう

になってからと見なしてよい。公共空間や路上がこのような環境になった時期を特定することが、非言語コミュニケーションの活用の拡がりを解明していく上で不可欠な知見となる。

また、00年代後半になって、ケータイ端末の筐体がファッションナブルになり、ケータイ端末本体も多機能・高機能化するようになった。ケータイ端末の多機能・高機能化は、一部のユーザの利用頻度を高めていき、結果として、公共空間で「ケータイのディスプレイを見る行為」が出現する頻度を押し上げていく効果を持ったと推測される。「ケータイのディスプレイを見る行為」がどのように拡がってきたのかを知るには、公共空間におけるこの行為の出現頻度がどのように推移してきたのかを俯瞰する必要がある。また、ケータイ端末のファッションナブル化と多機能・高機能化は、文献^[10]で指摘した「ケータイのディスプレイを”見せる”行為」とも連動している。この新しい非言語コミュニケーションの解明を進めるためにも、「ケータイのディスプレイを見る行為」の出現頻度の経年的な推移を調べていく必要がある。

しかしながら、「ケータイのディスプレイを見る行為」に関する記録は乏しい。00年代中盤から後半にかけて、歩行中の路上でのメール^[11]や、自転車を運転しながらのケータイ利用^[2]などが議論となった。が、これらの議論も、すでに路上などで「ケータイのディスプレイを見る行為」を行う人が相応に居ることは前提になっており、経年的な知見を得るには至らない。そこで本稿では、この行為が目立ち始めた時期の推定や増加傾向を大まかに概観するため、近似的な計測を試みる。その資料として、恋愛ドラマを採用する。

3. 恋愛ドラマの利用

3.1 恋愛ドラマの現代性と日常性

恋愛ドラマを資料とする、というのは、読者にとって、やや唐突に映るかも知れない。本章では、恋愛ドラマを対象にして取り上げる意義について解説する。ここで言う恋愛ドラマとは、まさに恋愛を通じた人間関係のあり方、恋の成就(または破局)、結婚への道程(または破談)などが主なテーマとなっているものを指す。明確な分類基準はないが、一般的な学園ドラマ、刑事ドラマ、推理ドラマ、医療ドラマとみなされるものは含まない。なお、本稿では、民放系列で放映された連続恋愛ドラマを取り上げる。調査対象となるのは、恋愛ドラマ内に登場するエキストラ、中でもケータイを利用するエキストラである。

恋愛ドラマの原型は1980年代から90年代にかけてほぼ完成したとされる。社会の変化と共に従来の規範が変化していく環境の中で、複雑化する恋愛関係、仕事との両立、家族とのつながりを通して生じる問題に対して、若者がどのように対峙し、どのように振る舞うかを提示するのが、恋愛ドラマの役割と言えるだろう^[12]。恋愛ドラマでは、特定の集団の中でずば抜けて傑出したヒーロー・ヒロイン(敏腕刑事や名医など)が主人公になって、卓越した活躍を描く、といった例は少ない。むしろ、多くの視聴者にとって身近な人物、つまり、仕事上の人間関係や家族関係、あるいは不本意な仕事への取り組みなどに悩みつ

つ、ありふれた失敗と成功を繰り返すような者が主人公である物語が多い。恋愛ドラマの視聴者は、現代における人と人との結びつきそのものをテーマとする物語の中に、自分との接点や共通点を見いだしながら、自らの言動や日常生活を振り返っている、と考えて良いだろう。

つまり、恋愛ドラマは、同時代を生きる人にとって、あり得そうな身近な物語として呈示される。そして、その物語の構成は、放映当時のリアルタイムの世相や風潮を反映すると共に、描写される主人公たちのライフスタイルが、多くの視聴者のそれと相応に近い必要がある。それらの描写を行うためには、物語の背景に映り込む人々(つまり、エキストラ)や街並みにおいても、現代的で日常的であることが求められる。

このような恋愛ドラマを調査対象にするメリットとデメリットを整理しておこう。主なメリットとしては、

1. 被調査者に了承を得る必要がないこと
2. 当時の状況が映像として記録されていること
3. 過去のデータの取得が容易であること

一方、デメリットとしては、

1. ドラマは作品であり、客観的事実を記録していないこと
2. ドラマ制作はスポンサーの影響下にあること

が挙げられるだろう。次節以降、このメリットとデメリットについて、順次検討しておこう。

3.2 恋愛ドラマのメリット

第1のメリットは、本研究において最も重要である。本研究の「ケータイのディスプレイを見る行為」の調査は、当人の身体動作を伴う行為を対象とするため、被験者の了承なしにデータ取得を進めることは倫理的に問題がある。そしてまた、現実問題として、街ゆく人々の各に逐一了承を得ることは不可能とあって良いだろう。一方、恋愛ドラマ内に映る人々(エキストラを含む)は、映像化され、放映されることを事前了解しているため、本調査の対象にすることが可能である。

第2のメリットは、ケータイ利用を調べる上での大きな長所になる。動画で撮影された映像は、ケータイ利用者の付加的な情報も併せて写し込んでいるため、「ケータイを使っている/使っていない」「通話中/ディスプレイを見ている」などの抽象化・記号化された情報以上の豊富な意味を提供する^[3]。利用する時間帯や場所はもちろんのこと、利用者の身なりや服装、およその年齢、並行して行う行動、端末の種類と色、端末へのデコレーションやストラップの有無、ケータイの格納場所(カバンの中か服のポケットか手に持ったままか)など、ケータイ利用にまつわる様々な情報が同時に写り込んでいるため、ケータイ利用者の行動を視覚的に理解することが可能になり、データ取得の助けになる。

第3のメリットは、過去の多くの恋愛ドラマがDVD化され、今なお、販売用あるいはレンタル用として市場に出回っている

点にある。過去に遡って街行く人々の行動の変化について、経年的に調査するための資料を確保することは、容易ではない。一方、過去の恋愛ドラマについては、一定の視聴率を獲得した作品や話題の俳優の出演作が相応の割合でDVD化されており、同じ制作年について、少なくとも複数の作品が入手可能になっている。このことから、制作主体やスタッフがそれぞれに異なりながら、同じ時期の映像を複数調べることが可能になり、資料の豊富さとバリエーションを獲得することによって、細かい時間刻み（ここでは1年単位）における変化の比較が可能になる。

3.3 デメリットの検討

上記に挙げた2つのデメリットについても検討しよう。

恋愛ドラマは、作られた作品であり、虚構の産物であり、客観的な事実を記録しているものではない。実際、ケータイを持って登場するエキストラの人たちは、ドラマの制作者側からケータイ端末（あるいは模造品）を渡されて、それを利用するような演技を行っているのである。このことは、エキストラの人々がまさに虚構の産物であることを表しているが、それと同時に、ケータイを利用するエキストラの人々の必要性が高いことを示している。つまり、ケータイを利用する登場人物がドラマに登場するのが当たり前となり、逆に、背景を通り過ぎる人々の中にケータイを利用する人が誰もいないことが「不自然」だと視聴者が感じるはずである、とドラマ制作者側が意識していることを表している。各々のドラマ制作者側は、自らの経験と推量を通して、ケータイを利用するエキストラの数と配置を調整し、現実の「自然」な街の風景に近づけようとして撮影していたと見て良いだろう。本稿では、それらエキストラを調査対象とする。ただし、単一の見方によって構成された「自然」さは、客観性に欠けて偏向しているリスクがつきまとう。そこで、本調査では、各年について2本の異なる恋愛ドラマを全編見通して調査を行い、2本の平均をとることで、一つの作品の制作スタッフによる単一の見方だけが反映されないように処理している。このことにより、近似的とはいえ、ケータイ利用者が増加していく「自然」な街並みの経年変化を概観することができると期待している。

また、第2のデメリットであるスポンサーの影響は懸念すべき事柄であるが、エキストラのケータイ利用の演出については、その作用はまず放念して良いだろう。エキストラに求められているのは、背景に徹することである。ドラマの制作過程において、ドラマの「図」である主人公や副主人公たちの振る舞いに対して、スポンサーのマーケティングの意向が強く反映される場合は十分にあり得るが、その意向が強ければ強いほど、背景であるエキストラ達の挙動は、より「自然」であることが求められる。恋愛ドラマは、視聴者達にあこがれの気持ちを喚起するような俳優達を主人公、副主人公に配役するのが通常であり、たとえ、物語内にマーケティングの意向をしのばせるにせよ、それらは主人公、副主人公達の振る舞いに反映されるべきであろう。むしろ、エキストラによって演出される背景としての街並みは、その当時に感じられる「自然」さに対して、より忠実

でなければならず、多くの（例えば視聴率が10%ならば、単純計算で1200万人以上の）視聴者の目に触れても遜色ないレベルの「自然」さが必要なのである。このことから、演出されたエキストラのケータイ利用は、スポンサーの意向の影響下にほとんどないと見なして良いだろう。

以上のように、恋愛ドラマのメリットの大きさとデメリットを勘案して、次章で紹介する調査を遂行した。

4. エキストラの「ケータイのディスプレイを見る行為」

4.1 調査概要

本調査では、「ケータイのディスプレイを見る行為」が、人々の間で広く認識されはじめ、その行為を見かけることが当たり前になった時期がいつ頃で、それがどのように増えてきたかを概観する。そのために、恋愛ドラマに注目し、公共空間の有様を経年的に比較する。調査対象となるのは、恋愛ドラマ内に登場するエキストラ、中でもケータイを利用するエキストラである。90年代後半以降の恋愛ドラマにおけるエキストラの使われ方を比較して、近似的に公共空間の変化を捉えていく。

年	サンプル(作品名)		見る	通話
1996	ロングバケーション	フジ	×	×
	おいしい関係	フジ	×	×
1997	バーজনロード	フジ	×	×
	理想の結婚	TBS	×	×
1998	PU-PU-PU-	TBS	0	100
	めぐり逢い	TBS	0	100
1999	魔女の条件	TBS	3	97
	パーフェクトラブ	フジ	3	97
2000	バスストップ	フジ	1	99
	真夏のメリークリスマス	TBS	1	99
2001	恋がしたい恋がしたい恋がしたい	TBS	27	68
	できちゃった結婚	フジ	27	68
2002	愛なんていらねえよ、夏	TBS	29	69
	空から降る1億の星	フジ	29	69
2003	元カレ	TBS	37	60
	僕だけのマドンナ	フジ	37	60
2004	オレンジデイズ	TBS	34	53
	ラストクリスマス	フジ	34	53
2005	ブラザー☆ビート	TBS	29	69
	anego- アネゴ-	日テレ	29	69
2006	フスの瞳に恋してる	フジ	34	66
	たったひとつの恋	日テレ	34	66
2007	ホテルノヒカリ	日テレ	30	57
	肩ごしの恋人	TBS	30	57
2008	イノセントラブ	フジ	28	53
	ハチミツとクローバー	フジ	28	53
2009	スマイル	TBS	41	41
	ブザービート	フジ	41	41
2010	素直になれなくて	フジ	60	27
	ホテルノヒカリ2	日テレ	60	27

表1：調査対象とした恋愛ドラマ作品

4.2 題材と調査方法

具体的手続きとして、1996年から2010年までに放映された恋愛ドラマをそれぞれ2本ずつ取り上げ、その中で出現した、ケータイを利用するエキストラの人数をカウントする。更に、その中で、「ケータイのディスプレイを見る行為」を行うエキストラをカウントし、ケータイを利用するエキストラ中でのこの行為の割合を算出する。ドラマ制作者側が、ケータイを利用

するエキストラを配置する際に、他の利用動作（通話やカメラ利用など）ではなく、まさに「ケータイのディスプレイを見る行為」を選択して、それが映像として放映された割合を求めて経年的に比較するのである。

題材にした恋愛ドラマの一覧を表1に挙げる（系列名は略称を用いている）。各ドラマは、3ヶ月弱（1クール）の間、毎週放送されて、各話1時間枠で10話-12話程度の長さ（各話実質44分から45分程度。初回と最終回に若干の延長を含むものがある）のものを2本ずつ選んでいる。「見る」の列には、「ケータイのディスプレイを見る行為」のエキストラの割合の平均値（%）を、比較のために「通話」の列には、通話動作を行うエキストラの割合の平均値（%）をそれぞれ載せた。

調査は、ドラマの全編をテレビ画面に標準速度で映し出し、実際に画面に映ったエキストラの内、ケータイを利用している者⁽⁴⁾の数をカウントして行った。画面に映ったエキストラについては、逐一ケータイを利用しているかどうかをチェックし、慎重を期すため、明らかにケータイを利用していると判定できるエキストラだけをカウントした。

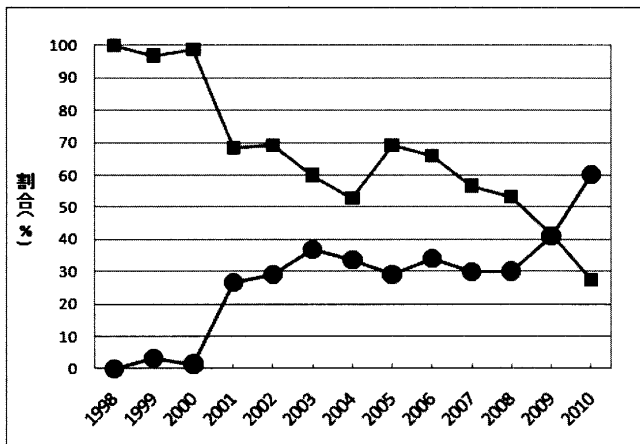


図1：「ケータイのディスプレイを見る行為」(●)、及び通話動作(■)を行ったエキストラの割合の経年変化

4.3 結果

ケータイを利用しているエキストラの内、「ケータイのディスプレイを見る行為」を行ったエキストラの割合の平均値(%)を(●)で、通話動作を行ったエキストラの割合の平均値(%)を(■)で図1にプロットした⁽⁵⁾。なお、1996年-1997年の計4作品については、ケータイを利用するエキストラが検出されなかったため、1998年から表示を開始している。

図1における経年的な変化から、少なくとも2つの傾向を見出すことができる。1つ目は、1998年から2000年について、「ケータイのディスプレイを見る行為」を行うエキストラの割合はわずかであるが、2001年から、その割合が増加している点である（通話動作のエキストラの割合は減少している）。2つ目は、2007年頃まで大きな変化が無かった「ケータイのディスプレイを見る行為」を行うエキストラの割合が、2008年から増加して通話動作のエキストラの割合に近づいていき、2010年では大きく超えてしまう点である⁽⁶⁾。

図1における2つの傾向は、恋愛ドラマの制作者側が街行

く人々の変化を感じ取り、「ケータイのディスプレイを見る行為」をするエキストラの割合を増やすような演出をした結果であると推察される。2つの時期における当時のケータイ利用の環境との関連を次節以降で考察しよう。

4.4 考察1 - 2000年-2001年

恋愛ドラマにおける「ケータイのディスプレイを見る行為」のエキストラの割合が2001年から増加することが意味することは、この行為が、公共空間や路上で、目立ち始め、その存在が繰り返し認識され始めたことを意味する。この認識の開始は、2000年-2001年の間、あるいはその少し前に起きたことが上記の結果から推測される。

1999年にNTTドコモがiモードサービスを開始して以来⁽¹³⁾、ケータイでの電子メールの送受信が容易になり、ケータイ端末を用いたメール利用者が増加した。また、ケータイという小さな端末で、場所を問わずにwebページに掲載された最新の情報を得ることが出来るようになった。このことは、ケータイを利用する行動において、ケータイ端末を耳にあてて通話する動作に加えて、ディスプレイの表示を注視する動作が増えていくための環境が整ったことを示している。図1における2001年頃の変化は、このような通信環境が公共空間でケータイを利用する人々の動作を変化させる条件になったことを示している。

「ケータイのディスプレイを見る」ような身体動作自体が、初めて公共空間や路上で行われた時期は、実際にはさらに遙かに遡ることになるだろう。しかしながら、本調査では、「ケータイのディスプレイを見る」動作が、どこかの誰かによって、この世界に発生した時期を問題としているのではない。公共空間や路上でこの行為を行う人々が目立ち始め、繰り返し認識されるようになった時期を突き止めることをその狙いとしている。この時期が2000年-2001年頃であったことを、本調査結果から見てとることができる。

4.5 考察2 - 2008年-2010年

2008年から2010年にかけて起きた変化については、「ケータイのディスプレイを見る行為」のエキストラの割合が増加して、通話のそれを逆転している点が注目される。街中でケータイを利用する姿を代表するのは通話ではなく、「ケータイのディスプレイを見る」姿になったことの表れである。このことをケータイの多機能・高機能化の観点から議論しておこう。

ソフトバンクがVodafoneを買収して、2006年10月からソフトバンクブランドによるキャリアサービスを開始して以来⁽¹⁴⁾、ケータイキャリア間の料金の引き下げ競争、多機能・高機能でファッションブルな端末の投入合戦が続き、通話・メール以外のケータイ利用の用途がさらに増加していった（この傾向は2011年現在もおお継続していると見て良い）。搭載カメラの高機能化、ディスプレイの解像度向上、3.5世代端末の増加による通信サービスの向上、検索サービスの向上など、キャリア間、端末メーカー間、さらにはサービスプロバイダ間の競争が拡大し、その後、スマートフォンが発売されるようになる（2008年7月、ソフトバンクからiphone3Gが発売されてから

スマートフォンの普及が本格化する)。

ここでは、ソフトバンクのマーケティングが本格化する2007年から2009年までの3年間のケータイ端末の契約数と出荷数を比較しよう。国内のケータイの総契約件数は、2007年1月で約1億件、2009年12月で約1億1500万件であり^[15]、一方でケータイの国内出荷台数は、2007年が約4,900万台、2008年が約4,200万台、2009年約3,100万台である^[16]。3年間の出荷台数の合計が、総契約件数の最大値をはるかに上回っていることから、この時期の多くのユーザが2007年から2009年の間で、1度は新規購入か機種更新をしたと推測される(全員ではない、複数台持ちで頻繁に更新するユーザも少なくない)。つまり、2009年以降には、多くの一般ケータイユーザが多機能・高機能な端末を持つようになったと見て良いだろう。多機能・高機能な端末を入手したからといって、すぐさま新機能を使うようになるとは限らないが、一部のケータイユーザ達が、それら新端末の機能を頻繁に活用するようになり、公共空間におけるケータイ利用頻度が相対的に高くなったことは容易に推察できる。この変化が、ドラマ制作側にも認識され、これまで以上に「ケータイのディスプレイを見る行為」のエキストラを増やした結果、図1における2008年から2010年までの変化が現れたと考えられる。

もしも、2008年頃から、公共空間における「ケータイのディスプレイを見る行為」の出現頻度が高まりつつあったならば、この行為による非言語コミュニケーションにおいて、以前とは異なる何らかの変容が起こっている可能性がある。「ケータイのディスプレイを見る行為」による非言語コミュニケーションは、周囲の状況に応じて行う場合が多いため^[8-10]、その行為は周囲の人々の行動変化に影響されやすいと考えられるからである。人々が行う非言語コミュニケーションについて、さらなる調査と研究が必要であると考えられる。

5. まとめ

公共空間における「ケータイのディスプレイを見る行為」の経年変化を探ることを試みた。調査資料として、恋愛ドラマのエキストラを活用した。2000年から2001年にかけてと2008-2010年にかけての2つの時期に、「ケータイのディスプレイを見る行為」のエキストラの割合が顕著に増加したことが確認できた。

4.4節、4.5節において、「ケータイのディスプレイを見る行為」のエキストラの割合の変化について考察した。通信環境、あるいは端末機能とサービスの変化を、2つの増加時期を説明する必要条件として述べた。しかしながら、環境や端末機能の整備だけでは、当時のケータイユーザ達が、それぞれの行動を選択した理由の説明には不十分だろう。ケータイ利用に対する当時の社会の風潮なども考慮せねばならないが、これらは別稿で議論する。

2011年現在において、街中で「ケータイのディスプレイを見る」人に出会うのは、もはや当たり前である。その当たり前の人々に出会う頻度が以前よりもさらに増えたと感じるものが

あるならば、その「感じ」を客観視して論ずる意義があると考えられる。我々の日常において、「ケータイのディスプレイを見る」人々を見かけるのが当たり前であるからこそ、問いかけを止めることなく、議論の俎上に乗せ続ける必要がある。本調査は、恋愛ドラマを資料として用いることにより、この「感じ」を数値化することが可能になり、その変化の経年的な比較を呈示している。つまり、公共空間において「ケータイのディスプレイを見る」人々が増えたと感じるようならば、その感じ始めた時期を、近似的に特定することが初めて可能になったと言える。

また、図1で表される変化は、あくまで「感じ」の変化に過ぎないものの、「ケータイのディスプレイを見る行為」のエキストラの割合の増加傾向は、3章での考察から、現実空間の変化を近似的に反映している、と見なして良いと考える。本稿で得られた2つの増加時期について、非言語コミュニケーションとしての分析を進めていくのが、今後の課題である。

注

- (1) 文献^[5]では、多くのケータイユーザが、他者の「ケータイのディスプレイを見る行為」に閉鎖的な印象を受けつつ、自らがその印象を意図的に利用してこの行為を行う場合があることを指摘した。また、文献^[6]では、ケータイユーザがこの行為を用いて、多重文脈性、すなわち、その場に居ない誰かとのリアルタイムの関係性を持っていることをアピールするために利用する実態を明らかにした。その後、公共空間におけるこの行為の利用意向の調査^[7]、親しい者同士がこの行為から受ける印象の多様性^[8]、その印象が変容する可能性^[9]、「ケータイのディスプレイを”見せる”行為」との関連^[10]をそれぞれ発表した。
- (2) 2009年7月以降、多くの都府県の公安委員会が道路交通規則の中で、自転車に乗りながらのケータイ利用の禁止を定めたため(表現は都府県によって、若干異なる。例えば東京都の例として^[17])、道路交通法71条第6号^[18]の定めにより、当該都府県における自転車に乗りながらのケータイ利用は道路交通法違反となった。
- (3) 象徴的な例として、2005年TBS系列で放映された『ブラザー☆ビート』第5話^[19]を挙げておこう。この物語において、主人公の二人(玉山鉄二、国仲涼子)が新宿区西新宿6丁目のLOVEオブジェクト前で待ち合わせをするシーンがある。このシーンにおいて、たくさんの通り過ぎるエキストラの中に、明らかに60歳を超えているように見えるエキストラが2人登場するが、2人ともケータイを利用するのである。一人がケータイのディスプレイを見ながら歩き(DVD再生時間で5分16秒頃)、もう一人がケータイで通話しながら画面を通り過ぎる(DVD再生時間で5分31秒頃)。筆者が調査した範囲内では、2005年以前には、このような年配のエキストラがケータイを利用する場面はなかった。昼間の都心とはいえ、60歳を超えているだろう年配の人が路上でケータイを利用する(しかも、一人はケータイのディスプレイを見ている)光景が、すでに2005年には充分あり得たことをこのシーンは物語っている。当時のシニア層におけるケータイの普及状況のみならず、利用場所や利用の仕方までもが象徴的に映し出されていると見て良いだろう。
- (4) ケータイを利用しているかどうかの判別が難しい場合は、何度か画面を巻き戻し、コマ送り機能などを用いて、ケータイ利用の有無を確認した。エキストラは、一般に映像の焦点(ピント)がずれていることが多く、また、短い時間しか映らないため、ケータイを利用しているかどうかの判別が難しい場合が少なくない(例

- えば、通話しているように見えるが髪型や体の角度のためにケータイ端末が隠れてしまっている場合、ケータイの画面を見ているように見えるが手元がはっきりしない場合、カバンの中のケータイが鳴って取り出そうとするかのように見えるが着信動作に至る前にカットが変わる場合、など)。そこで、ケータイを利用しているかどうか疑わしい場合には、ケータイ端末が一部見えているなど、その利用が説得的に目視できる場合のみをカウント対象とした。
- (5) エキストラの中には、ほんの数コマしか映らない者もいれば、数十秒間映り続ける者もいるが、本調査では、長さに関係なく、一律に一人分とした。また、一定時間映り続ける中で、動作が変わり、ケータイのディスプレイを見ている動作から通話する動作に移るエキストラ、逆に、通話動作からケータイのディスプレイを見る動作（切断状態や通話時間を確認する行動を演じていると思われる）に移るエキストラが存在する。この2つの場合のエキストラは、「ケータイのディスプレイを見る行為」のエキストラとしては0.5人分とカウントした。
- (6) エキストラの総数は、ドラマ制作の予算配分によって大きく異なり、また、ドラマの設定（主な登場人物がサラリーマンか学生かその他の職業か）や舞台（多くは東京、横浜あるいはその近郊であるが、その他の地域の場合もある）の影響を大きく受けやすい。男女の主人公同士が同じ職場（学校）であるか否か、同じ駅を利用するか否か、などの設定もドラマ全体のエキストラの数に大きく影響し、ケータイを利用する者の数にも関わってくる。よって、本稿ではエキストラ数そのものではなく、エキストラの割合を算出して経年比較を行っている。但し、注(4)で述べたように、エキストラの検出には不確定要素があるため、各ドラマで算出したエキストラの割合には、誤差が混入しやすい。数値には誤差が含まれやすいことを予め考慮した上で、全体的に見られる大きな変化に注目されたい。

参考文献

- [1] 富田英典：「都市空間とケータイ」、岡田朋之、松田美佐編、『ケータイ学入門』有斐閣選書、pp.49-74、(2002)。
- [2] 松田美佐：「ケータイをめぐる言説」、松田美佐、岡部大介、伊藤瑞子編、『ケータイのある風景』北大路書房、pp.1-24、(2006)。
- [3] 中村隆志：“90年代後半以降の恋愛ドラマにおけるケータイ利用とその分析”，第18回情報文化学会大会講演予稿集、pp.75-78、(2010)。
- [4] 中村隆志：“恋愛ドラマとケータイのコミュニケーション論：90年代後半以降の時代区分”，情報コミュニケーション学会誌（投稿中）。
- [5] 中村隆志：“非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」”，情報文化学会誌、14(1)、pp.31-38、(2007)。

- [6] 中村隆志：“多重文脈性をまとうツールとしてのケータイ”，情報文化学会誌、15(1)、pp.12-19、(2008)。
- [7] 中村隆志、大江宏子：“公共空間における非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」”，情報文化学会誌、Vol.4、No.1、pp.27-37、(2009)。
- [8] 中村隆志：“親しい者で行う非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを見る行為」とその多様化”，情報コミュニケーション学会誌、Vol.4、No.s1&2、pp.4-9、(2008)。
- [9] 中村隆志、大江宏子：“非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを見る行為」における「気づき」の効果”，情報文化学会誌、16(1)、pp.31-37、(2009)。
- [10] 中村隆志、大江宏子：“もうひとつの非言語コミュニケーション「ケータイのディスプレイを”見せる”行為””，情報文化学会誌、Vol.17(1)、pp.11-18、(2010)。
- [11] モバイル社会研究所：『モバイル社会白書 2006』、pp.220-227、(2006)。
- [12] 伊藤守：“テレビドラマの言説とリアリティ構成”，『テレビジョンポリフォニー』、伊藤守、藤田真文編、世界思想社、pp.86-107、(1999)。
- [13] 会社の沿革、会社概要、NTTドコモ公式ホームページ、<http://www.nttdocomo.co.jp/corporate/about/outline/history/index.html>。(2010年12/28参照)。
- [14] 沿革、企業情報、ソフトバンクモバイル公式ホームページ、<http://www.softbankmobile.co.jp/ja/info/history/index.html>。(2010年12/28参照)。
- [15] 電気通信事業者協会 HP、<http://www.tca.or.jp/japan/database/daisu/index.html>(2010年3/20参照)。
- [16] 携帯電話国内出荷台数実績、統計資料、JEITA公式サイト、<http://www.jeita.or.jp/japanese/stat/cellular/2010/index.htm>(2010年3/20参照)。
- [17] 「東京都の道路交通規則が変わりました!」、広報けいしちやう第36号Web版、警視庁公式HP、http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/kouhoushi/no36/r&m_koho36.htm。(2010年12/28参照)。
- [18] 道路交通法、総務省法令データ提供システム、<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S35/S35HO105.html>。(2010年12/28参照)。
- [19] 『ブラザー☆ビート Vol.3』(DVD)、TBS、ビクターエンタテインメント(2006年発売)。

中村 隆志 (なかむら たかし)

新潟大学人文学部教授。専攻は情報メディア論。94年広島市立大学情報科学部助手、95年新潟大学人文学部助教授(07年より准教授)を経て2010年より現職。ケータイ利用の非言語コミュニケーションや口コミに関する研究を継続中。